

アレクサンドル二世暗殺未遂事件と日本人

— 慶応三年パリの徳川昭武 —

森 仁 史

一八八一年の暗殺以前に、一八六七年パリにおいてもアレクサンドル二世は命を狙われたことがあった。本稿はこの事件をめぐる日本人の意識と政治の表象化とについて考察を試みようとするものである。

—

一八六七年二月一日（和暦では慶応三年正月一日。以下日付の（ ）内は同じ）徳川昭武を使節とする遣仏使節団一行三三名が横浜を出港した。昭武は將軍慶喜の美弟でこの時満二三歳であったが、日本が初めて正式に政府として参加したパリ万国博覧会に將軍の名代として出席し、その後引続きヨーロッパで三〇五年間留学することを命ぜ

られていた。⁽²⁾

大名クラスの人物が国外に派遣され、さらに留学することは史上初めてのことであり、これは竹内保徳使節団（一八六二年）で着手された幕府による外国「探索」の拡大集大成とも言うべき事業であった。⁽³⁾

慶喜を中心とする幕府開明派は将来を見越して日本の近代化を担いうる人材とヨーロッパ各国との良好な外交関係を得ようと企図したのであった。使節団には勘定奉行格外国奉行向山隼人正一履、徳川昭武傳役山高石見守信離⁽⁴⁾のほか、田辺太一、高松凌雲、渋沢栄一などが含まれていた。一行は四月三日マルセイユに到着し、一日夕刻七時頃パリはグラン・オテルに入った。⁽⁴⁾ 奇しくも、ロシアとの国境交渉の帰路にあった小出大和守秀美一行一〇名が間近のオテル・ド・ルーブルにこの三日前から逗留しており、同夜小出は昭武に伺候している。⁽⁵⁾ 追って、栗本貞二郎取締をはじめとする幕府留学生一名が派遣され、一月パリに到着して合流し、総勢四〇人あまりの派遣日本人がパリで「探索」と折衝の日々にあけられることになった。

万国博覧会は四月一日より既に開幕していたが、昭武は四月二八日テュイルリー宮殿においてナポレオン三世に謁見し、將軍からの国書を奉呈した。七月一日、万国博覧会表彰式が行われ、日本の出品物にもグランプリが授与され、昭武はこれに出席した後、九月から二月にかけてスイス、オランダ、ベルギー、イタリア、マルタ（イギリス軍港）、イギリスの順で条約締結各国を公式訪問し、元首と会見した。⁽⁶⁾

一月中旬より昭武は前記留学生を相手として留学に専念し始め、鳥羽伏見の敗戦が伝えられた翌年三月以降も留学を続行したが、九月六日（七月二〇日）には維新政府より六月二五日（五月六日）付けの大総督有栖川宮熾仁の名による二度目の帰国命令が到着し、同日、尊王の素志厚い昭武の意志で帰国が決められ、九月には勉学を中止し、翌一〇月二五日にパリを出発し、一二月一六日（一月三日）に横浜港に帰着した。⁽⁸⁾

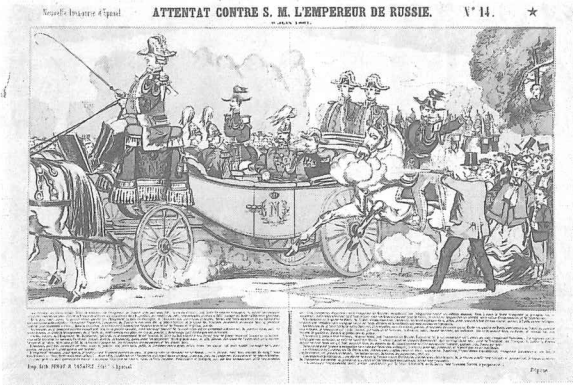


図1 「ロシア皇帝陛下に対する暗殺の企て」



図2 カルポー作「1867年6月6日」

この事件を題材とした二枚の画像を考察してみよう。一枚は民衆版画(図一)であり、もう一枚は当時第二帝政から次々と国家的モニュマンに彫刻の制作を委嘱されていた彫刻家ジャン・バチスト・カルポー(図二)のものである。⁽¹³⁾

三

ドニアへ苦役に送られ、一八八六年には流刑になった。⁽¹²⁾

二

アレクサンドル二世は皇太子とウラジミール大公や皇后、皇女らを伴って六月一日列車でナポレオン三世の待ち受けるパリ北駅に到着した。ここからテュイルリー宮殿までの両側には群衆がひしめき、「皇帝万歳!」のほか「ポーランド万歳!」という叫び声も聞かれた。かつて、一八一四、一五年にアレクサンドル一世が滞在したエリゼ宮殿に逗留した。⁽⁹⁾

六月六日、一二時半よりブローニュで六万人の兵士が参加して軍事演習が行なわれ、これを視察した帰途、アレクサンドル、皇太子、大公、ナポレオン三世は馬車に同乗し、群衆の群がるロンシャン通りを避けてボワ・ド・ブローニュ通りに向ったが、ここで馬車を待ち受けた二〇歳のポーランド人青年アントニ・ベレゾフスキBerezowski, Antoniがロストルでロシア皇帝を暗殺しようとした。第一弾はフランス人侍従の馬の鼻に当たり、第二弾は暴発し、犯人自身の手の指を砕いた。このため、ナポレオン三世を始め、アレクサンドル二世、皇太子たちには馬の血が降りかかったが、誰もけがはしなかった。⁽¹⁰⁾ベレゾフスキはその場で捕えられた後、パリ警視庁へ護送された。かれはヴォルニニ生れで、パリ万国博覧会場の建設に従事し、その後移民としてパリに住み、年金を受けていた。

ロシア皇帝の健康には全く何の支障もなかったので、夜一〇時よりロシア公使館でナポレオン三世夫妻出席のもと予定どおり舞踏会が催され、日本使節団からは昭武をはじめ、向山隼人正、山高信離、通訳シーボルトが出席した。⁽¹¹⁾

この事件の後もアレクサンドルは名所を訪ねた後、六月一日フランスを去り、バーデン・バーデンへ向い、六月一八日ワルシャワに到着した。他方、ベレゾフスキにはフランス国内で大いに同情が集まり、裁判の結果ニューカレ、

前者は一七三五年から発行されていたエピナル版画のうち、一八六五年創立のピノ・サゲル工房の摺った『新エピナル版画』Nouvelle Imagerie d'Epinalのうちの一枚である。一八五五年のパリ万国博覧会以来、社会的テーマとして博覧会そのものがしばしばとりあげられたが、第二帝政下ではナポレオン三世自身はもっと頻繁に描かれた。しかし、やがてより正確な現実再現を可能とする写真にその地位を奪われてゆくことになる。

この版画はきわめて、明快に主題を描いている。つまり、中心にアレクサンドルとナポレオンが置かれ、右端に暗殺者が描かれている。そして、皇帝の暗殺を阻もうとしている皇帝侍従ランボーとその馬が英雄的に描かれている。群衆はベレゾフスキのすぐ隣の少数の他は総て皇帝たちを注目している。

作者の意図は非常時にも毅然として皇帝を描くことにあり、添えられた文章にも、民衆のベレゾフスキに対する「激怒と憤慨の騒動は筆舌に尽くし難く」、衛兵隊大尉ルベともう一人が暗殺者に飛びかかったが、群衆はベレゾフスキを虐殺しかねなかったと述べられている。滞在中の皇帝アレクサンドルへのフランス国民の同情は止むことがなかったと伝えている。これは同版画が皇帝から出版許可を得て発行されるものであることを考慮する必要があるのかも知れないが、ナポレオン政府からすれば、こうした観点から市民の情感に訴える必要があったと解すべきであろう。

もうひとつの絵の作者カルポーは彫刻家として一八六五年にはオペラ座のためにかれの代表作ともいえる「ダンス」をナポレオン三世の命で制作し、ほかに皇帝一家を題材に「皇太子と愛犬ネロ」(一八六五年)、「ナポレオン三世(胸像)」(一八七三年)を制作するほどの立場にあった作家である。また、カルポーはこの一八六七年パリ万博に作品を出品し、彫刻部門で一等牌を受けている。⁽¹⁵⁾

カルポーの絵画作品は今日ではあまり省みられることもないが、大胆な筆使いと思いきった色使いで大掴みに対象を把握し、情景のムーブマンと印象を骨太に再現する技量に秀でている。この作品では、夕方のブローニュの森が暗く大きく描かれ、遠く青空がのぞいている。中央近くでとくに描きこまれたベレゾフスキが銃を発射しており、まわりの人々が慌てふためいている様が動的に描きこまれている。馬車は彼方から前方へ流れるように描かれ、皇帝たちは群衆の方に顔を向けているが、傷ついた様子はなく、ここでは暗殺者と英雄的な侍従が中心に描かれている。カルポーはいくらかこの暗殺の劇的側面からインパクトを受けたのかもしれない。

四

この日の演習には、徳川昭武、向山一履、山高信離、保科俊太郎、田辺太一、栗本貞二郎、山内六三郎、洪沢栄一などが招かれ、ブローニュからは午後四時過ぎに宿舎に戻った。

この事件への日本人の反応としてすでに洪沢のものと同様のものが紹介されている。⁽¹⁶⁾

ベリゾフスキー青年は、最初から一命を投げ出しているもので、逮捕されてからは少しも卑怯な振舞もなく、訊問に際しても更に恐ろしい気色も見えず、幾度も繰り返して理路整然と兇行を企てた顛末を答辯し、聊かも取亂した風が無かったので、其の沈着な志士的態度には、並み居し人々も密かに感嘆した。

つまり、洪沢はフランスの報道とは反対に、ポーランド人の行為を愛国的心情の発露とみて、フランス人も感動したと理解しているのである。もちろん、パリの民衆のあいだにポーランドに対し同情するものが多かったのも事実

であろうが、それよりも自身の尊攘派としての幕末の直接政治行動者として琴線に触れるものを感じとったのであるう。

さらに徳川昭武の見解をみてみよう。かれはこの頃もその後も多くの日記類を残しているが、激動期の指導者らしく軽々に自己の見解を披瀝することは稀有で、常には事実経過を淡々と記すだけであった。⁽¹⁷⁾だが、この事件については意識的にまとまった見解を書き残している。

今日ロシア王帰り候時道に瀧^{タカ}之有所⁽¹⁸⁾ニ而ポーレン⁽¹⁸⁾國之人短筒ニ而ロシア王を狙ひ撃つ。当たらずして召捕らる。是ハ先年其父、魯國之為メニ生捕られ、國も滅亡ニ及ひし故、君父之仇(なれハ既ニ數年前魯國江参り、戲園之内ニ而魯王を狙撃す、打漏して出奔し今日之事ニ至る)を報ゆる為也云ふ。生年僅ニ廿歳、利欲之世界ニ一人之義奴を見る。感嘆之餘りしるす⁽¹⁹⁾

いくつかの事実認識に差異があるものの、先に引いた洪沢栄一の見解と同工異曲である。しかも、徳川昭武はこの事件の二日前にはアレクサンドルから観劇に招かれて陪席しており、本人を親しく知っていたにもかかわらず、ポーランド人の行為に感嘆を寄せている。これには昭武が訪仏以前には血腥い京都であって、まして四年前の禁門の変では一方の戦闘参加者であってみれば自己の政治的信条と行動にヨーロッパ人のそれを重ね合わせて、無条件で投企できたのは幕末日本の激動の当事者意識の底流のゆえと思われる。⁽²⁰⁾

しかし、すべての日本人が同じ感興に終始したわけではなかった。栗本鋤雲はこの事件の背景がポーランド分割にあることに触れた後で、次のように記している。

然して獨り魯の波人遇する人理を以てせず、苦役虐使至らざる所なく、且波人をして刀匙の外身に寸鐵を佩るを得せしめず。於是波の遺民深く魯帝に恨みあり、丁卯の年魯帝法に來り博覽會を閲し、法帝と共に郊外に出遊することあり、波の遺民竊に伺ひ之を銃す、不^レ中、邏官乍^レ是を擒せり既にして讞獄の日流に處す。

和春云、遺民敵國の帝を狙撃す、法律に於て報讎の屬とす、私怨人を殺すの類に非ず。故に法帝是を流に處し、魯帝更に不^レ疑と云ふ。⁽²¹⁾

暗殺の理由を分割の情動的な遺恨にことよせようとしてはいるものの、カシヨンともこの事件の処理について論じあったようで、流刑処分の理由を民族主義的な抵抗権に求めているのである。

静岡県立中央図書館所蔵の「御用留⁽²²⁾」には向山一履筆と思われる日記が含まれているが、その見解はいたって簡潔で、「此調兵相済、帰途波蘭の殘民魯帝狙撃せるものなり、幸いにして難無罪人召捕えらる」とのみ記されている。また、六月一五日〔五月一三日〕付けの向山から外国奉行宛の手紙では「一个之狂暴者ヒストルを以て魯帝を狙撃致し候所、車旁之親兵馬を乗懸け候て相支え候に付、幸に炮丸を免れ候⁽²³⁾」と報告している。ここにはベレゾフスキに対する思い込みが全く読みとれないが、「波蘭の殘民」という表現はポーランド分割や一八六三〜四年の一月蜂起とその失敗などのヨーロッパ情勢に通じていたことを窺わせる。

そして、この日記によれば、翌朝ナポレオン三世に調練參觀の挨拶とアレクサンドル二世に舞踏会の礼状を送り、「昨日魯帝不慮之変に被逢候處、幸に免れ候歎状、公子より被差遣」たと記されている。ここには、自らの置かれた位置と取るべき国際政治上の行動に対する幕府外交官の沈着な判断が見て取れる。



図5 ゲマール撮影「徳川昭武像」
(1867年)



図6 内田九一撮影「徳川昭武像」
(1872年)



図3 「各国君主を迎えるナポレオン3世」

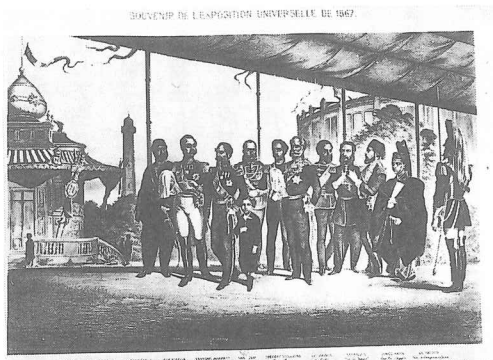


図4 「1867年万国博覧会土産」

すでに列強の外交的軋轢のなかに否応なく投げ込まれた日本の立場とそこにおいて処すべき方法について幕府外交官は相当の経験と判断力を身につけてきていた。万博出品政府の呼称について、幕府外国奉行側に失点があったことに対しても、使節団はこれを挽回すべく的確な対抗措置をその後講じた。この対応策を講ずるためもあって、外国奉行栗本安芸守瀨兵衛が追って派遣され、九月一日ジュネーブで昭武一行に合流した。かれの任務には七〇〇万フランの対仏借款の他に、將軍の呼称問題の決着があった。五月二日(三月二十八日)、パークス公使のみが大阪城での会見時に慶喜に対し「陛下」を用いなかったことに対して、イギリス政府に抗議し方針変更を迫ることであった。昭武のイギリス訪問中の二月一日午後、幕府の訓令を受けて向山は全権公使として、表敬訪問とは別にスタンリイ外相を外務省に訪ね、呼称問題について直接抗議した。この時、弱冠二歳の外国奉行翻訳御用頭取箕作貞一郎の手になる英文の「琉球諸島に関する通告」も手渡された。この闊達な筆致で記された文章では、実に堂々と「わが大君陛下がその始祖より真の政権の保持者であり、……大名は土地を持っていても大君陛下に臣従するものにほかならないし、また、琉球は……大君陛下によって薩摩守へその支配地の一部とするよう譲られたが、当時確立された規定は全く変わっていない。」と述べ、薩摩藩の主張する「琉球薩摩大守政府」が全く根拠のないものであることを主張している。

五

万国博覧会がパリで開かれるのは一八六七年が二度目であったが、第二帝政下でオスマンの指揮によって大規模に都市改造が開始され、ナポレオン三世はこの博覧会を積極的に自己の権勢顕現の場として利用しようとした。つまり、

産業の振興と同時にナポレオン三世の外交国内問題の失敗を覆い隠し、人気を回復する狙いを持っていたので、極東からも君主を招く必要があったのである。⁽²⁶⁾このために印刷媒体は広範囲に利用され、博覧会に出席する各国君主の肖像入りのスーベニールがさかんに作成された。

「各国君主を迎えるナポレオン三世」と題された版画(図三)は中央にナポレオン三世、皇太子、ウジェニー皇后が一段高く描かれ、両脇にロシア皇帝アレクサンドル二世(右)、オーストリア皇帝フランツヨーゼフ(左)が並び、第一列は右にプロシヤ王フリードリヒ、スウェーデン国王カルル一五世、左にオスマン・トルコ皇帝アブヴル・アズィズ、エジプト国王イスマイル・パシャと並び、この隣の昭武は「大君、日本皇帝の弟」と説明されている。

これと同一の背景をもつもうひとつの版画(図四)がある。万国博覧会の主展示会場である産業宮 Palais de l'Industrie の前に各国元首が並び、左側に皇帝パピリオン、遠く左手に灯台の見える構図はまったく同一である。

昭武はこの右端に位置しているが、この図像は明らかに昭武のブリュッセルで撮影した肖像写真(図五)をもとにしている。また、この後日本で撮影された写真(図六)があるが、恐らくスタジオのカメラマンの指示に従ったと思われるポーズの図五と較べれば明白なように、これは明らかに君主としての威厳を表すポーズとはなっていない。これは経験を積んだ日本人カメラマン内田九一にとってさえ、この時点でもその地位に相応しい肖像として自らを意識的に政治的表象として定型化することはまだ理解し難かったことを示している。

図四の忠実な描写に対して、図三では着衣がヨーロッパ人の目を通して相当変容し、顔の表情もかけ離れたものになってしまっている。同種の変容はある程度この時期のフランス人の日本人像の反映でもあり、他の風俗的図像にしばしば見い出される。この図四はいくぶん見上げる視角で君主たちや会場の建物を描いており、左方へ進みゆく君主たちの力と前進を強調するのに成功している。平板な図三に較べれば、はるかに優れた構成のなかで、ポーズとして

昭武独りが孤立しており、フランス人作家にとって、この極東の君主をどう肖像として位置づけてよいのか確信が持てなかったのであろう。その困惑ぶりがさしあたっての詳細な現実再現に向かわせたものではあるまいか。⁽²⁷⁾

いったいに、当時の日本人は写真に非常に興味を示したが、それは新奇なものとしての写真への関心であり、そのイメージの政治力の掌握、利用までには到っていない。むしろ、ヨーロッパの写真家のオリエンタリズムの対象として取り込まれるばかりであった。昭武以前の池田筑後守長発、柴田剛中使節団員も写真スタジオを訪れ、ナダールがかれらを撮影した写真がよく知られている。

昭武たちはグラン・オテルに宿泊したせい、か、近辺のイタリエン通り二九にあったヌマ・ブラン Numma Blanc の写真スタジオを訪れている。使節団にはカルト・ド・ヴィジット carte de visite として使節徳川昭武の肖像写真が必要だったのである。また、將軍慶喜の肖像写真もナポレオン三世への新年の挨拶の際に贈っている。⁽²⁸⁾

パリで、次いでヨーロッパ各国で昭武は「日本の殿下」と呼ばれ、新聞紙上などではプリンス・トクガワと呼ばれるようになる。⁽²⁹⁾これは、直接には日本人使節団員が使用した尊称の「公子」が訳されたものかと思われるが、各国の王族と宮廷外交をくりひろげる昭武とその一行はそう呼ばれるに相応しい活動を実際に展開したのであった。⁽³⁰⁾また、好むと好まざるにかかわらず要請される対外接触交渉に伍すべき外交的能力も使節団には備わってきた。しかし、自らを権威づけるための肖像は意識にのぼっていなかったし、通訳として雇ったシーボルトのイギリス外務省の意を受けた工作により向山、山高がそろって親英派と化すのを許してしまうほどにはナイーヴであったと言わねばならない。

ロシア皇帝暗殺未遂事件は幕末の日本人にとって義拳と映ったようだが、これは切迫した政治状況のもとにあった当事者の直情的な仮託と言っべきであった。これを世論操作に利用する第二帝政と日本使節団員との政治事件に投影

される了解咀嚼の差異は政治的熟度の落差を指し示していた。このとき、ヨーロッパではすでに事件の政治的表象としての画像を意図的に利用するところまで到達していた。それらのなかには極東の君主として昭武すら取り込まれていたものの、幕府開明派には自らの手で政治的表象として自己を洗練させるだけの時間がもう残されていなかった⁽³¹⁾であった。

エピソード

徳川昭武は生涯にもう一度ロシア皇族暗殺未遂事件に遭遇した。明治二四年五月一日、ロシア皇太子の日本訪問中のことである。この時、昭武は日記に次のように記している⁽³²⁾。

全十一日

一、午後九時半京都も急使^急倒來、過般より漫遊中なる露皇太子ニコラス殿下、本日江州大津駅ニ於御遭難ニ付、御訪問取止メ 天皇陛下明早朝新橋御發奉、京都へ 行幸被成出タル旨通知アリ、依テ全十時頃出京ス

全十二日

一、午前五時新橋停車場へ出向、奉送ス

この時、昭武はすでに水戸徳川家当主を退き松戸に隠居しており、麿香間祇候として明治天皇に近侍する身分であったが、新橋駅頭に立つかれの心中には二四年前の事件が去来しなかつたらうか。再度、一四日天皇は京都へ発った

が、この時は麿香間祇候を代表して徳川家達が見送りに加わった⁽³³⁾。

ニコライ皇太子は父アレクサンドル三世の命により、六月一九日神戸を離れた。昭武は二〇日には一旦松戸に戻り、二八日に上京し、宮中に参内する。

全廿八日

一、午前出京、参 朝如例、拜謁不被仰付之事
一、午後山高信⁽³⁴⁾氏ヲ訪

既に政権の当事者ではない徳川昭武が参内しても天皇は引見するゆとりなどなかったであろう。この日、かつてパリで同じ体験を経た山高信離との間には、訪ねた昭武との間に何が語りあわれたのであろうか。

註

(1) 日比野清作『横浜日記』正月一日の条。使節団の内訳は使節団二四名(内水戸藩士小姓七名、使用人八名でこのほかイギリス公使館通訳シーボルト、フランス領事デューリーが同行した。

(2) 『徳川慶喜公伝』史料篇三、『続日本史籍協会叢書』東京大学出版会 昭和五〇 二八二―三三ページ。ただし、日付は明治元年ではなく慶応三年とすべきである。

(3) 松沢弘陽『英国探索始末』、『日本思想大系』66 西洋見聞集 岩波書店 一九七四

(4) 『渋沢栄一傳』、『日本史籍協会叢書』126 東京大学出版会 昭和四二、四三ページ(以下「渋沢」と略す)。徳川昭武『越海日記』、『表題無之二付目録二は御日記慶応三年丁卯卜認置与』、『松戸徳川家資料目録』第一集 I―1、2) 後者を以後「御日記」と略す。

- (5) 内藤逐『幕末ロシア留学記』雄山閣 昭和四三 五六ページ。
- (6) 『L'Exposition Universelle de 1867 Illustré』, p.18. 渋沢 四七一―二〇三ページ。
- (7) 渋沢 七月二〇日の条。三四―三ページ。他にも向山、山高の史料に反して留学生活続行のためベルゴレーゼ街での生活を切り詰める内意を栗本鋤雲にもらすなど、昭武の滞欧学習への強い意志と使節団の行動への影響力は看過できないであろう。「川勝家文書」、『日本史籍協会叢書』57 東京大学出版会 昭和五九 二八―二九ページ参照。また、これ以外にも幕府首脳から帰国を促す手紙が送られた。これらは維新政府にとって昭武使節団が外交内政両面にわたって気障りな存在であったことを伺わせる。明治元年五月四日付け三條三実書翰は「民部大輔当節之通永く仏国に差遣候而は後患深く可畏候」と述べづる。「岩倉具実関係文書 三」、『日本史籍協会叢書』20 東京大学出版会 昭和五八
- (8) 御日記
- (9) Pyeckin Biorpaphueckin crouapb. tom.1, pen. N.Y., 1962, cTp. 640-41. 『Illustrated London News』, June 8, 1867.
- (10) 『Illustrated London News』, June 15, 1867. 渋沢 六七一―七五五ページ。
- (11) 渋沢 七月二〇日の条。御日記 五月四日の条。
- (12) 『Wielka Encyklopedia Powszechna PWN』, Warszawa, 1962, s. 708.
- (13) 『Nouvelle Imagerie d'Epinal』, No. 14, 1867. ロン・ユニー国立博物館蔵。発行月日は分らないが、セーヌ重罪裁判所の判決直前のモノであると推定される。『Le 6 juin 1867』オルセー美術館所蔵。voir de Margerie, L. Carpeaux. La fièvre createur, Paris, 1989, p.69.
- (14) George, H. L'Image d'Epinal: Histoire et Fabrication, 『Paris raconte par l'image d'Epinal』, Musée Carnavalet, 1990, pp. 15-16. 例えは「一八三〇年には一年に二〇万種類もの版画が摺られ、年間一種類あたり五千部が発行された。」
- (15) 『L'Exposition Universelle de 1867 Illustré』, p. 318.
- (16) 渋沢栄一口述 小貫修一郎筆記『渋沢栄一自叙伝』渋沢翁頌徳会 昭和二三 一六五ページ。なお、この部分の記述は『航西日記』に基づくとされているが、甚だしく記述が変わっており、別のものと考えた方が自然である。また、『航西日記』のこの部分に記述は『徳川昭武滞欧記録』第一所収の「一〇 歴山帝へ対する不敬事件(ラシエクル新聞抄訳)」が原文とされる。
- (17) このほか、栗本にナポレオン三世の人物評を次の様にもらしてあり、あながち年少者と過小評価できない見識を示している。「予屢々「ナポレオン」に席見するに、容貌不揚、言詞咄々口より出すに不能に似たり。……大智は愚なるが如し、其れ此の謂いか。」栗本鋤雲「暁窓追録」『瓠庵遺稿 一』、『続日本史籍協会叢書』東京大学出版会 昭和五〇 五六ページ。
- (18) フランス語新聞から訳出したにもかかわらず、国名はオランダ語読みとなっている。使節団員の日記ではこうしたオランダ語表音化はしばしば見受けられる。
- (19) 御日記 五月四日〔六月六日〕の条及び前記「越海日記」の末尾にまとめて記されたもの。()内は「越海日記」の記述で異動のある部分。なお、同日記中には左の異文も含まれ、こちらはより正確な部分もある。いずれにせよ同一の事件についてこれだけ多くの記述があるのは全く異例である。
- (20) ニ而「ポログネ」魔王之子短筒ニ而「ロシヤ」王を打掛ル処、当ずして警衛騎兵之馬之耳江当り、即座ニ召捕らる。是ハ先年魔王「ロシヤ」之為ニ召捕られ國
- (21) 栗本鋤雲 前掲書 五四―五五ページ。
- (22) 「御用留」(静岡県立図書館蔵文庫) 六月六日の条。
- (23) 同右
- (24) 田辺太一『幕末外交談』二 東洋文庫 一九八八 二五五ページ。田辺はこの吐責を受けて急遽帰国することとなった。
- (25) Memorandum of Japanese Minister. (F. O. 46, No. 86), Public Record Office, Kew. これはフランス大使ロッシェの示唆〔四月一三日〕によるものである。「徳川慶喜公伝」第三『続日本史籍協会叢書』東京大学出版会 昭和五〇 七〇―七三ページ。

- (26) McMillan, J. F. Napoleon III, L., 1991, p. 138.
- (27) 多木浩二『天皇の肖像』岩波新書 一九八八 一四三ページ。ある傾向をもった日本人像の変容についてはさしあたり、『Le Monde Illustré』, mai 21, 1864, 『L'Exposition Universelle de 1867 Illustré』, juillet 22, 1867. を指摘しておく。
- (28) 御日記 二月八日の条に撮影と記されたものが「昭武と愛大リモン」(『松戸徳川家資料目録』第一集 一—一〇、4) ほかである。渋谷 二一八ページ。同スタジオはこの年シルク・ナポレオンに出演していた浜錠定吉一座も撮影している。Marbot, B. *Objectif Cipango. Photographies anciennes du Japon*, Paris, 1990, p. 29. また、一八七五年撮影の別の写真によると、この後継スタジオ Lancerock は日本大使館御用写真師となった。榎本武揚文書 17 (国立国会図書館憲政資料室所蔵) 参照。ジャン＝A・ケイム門田光博訳『写真の歴史』白水社 一九七二 四五一—五〇ページ。
- (29) 『Illustrated London News』, December 21, 1867; 『The Times』, December 13, 1867; 『L'Indépendance Belge』, septembre 26, 1867. など、いずれも prince とらう称号が使われている。もっとも記事の内容が豊富な『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』一八六七年二月二一日号の記事は明らかにアレクサンドル・シーボルトの外務省宛報告書を下敷としており、ほかの国の場合も同様に幕府の意を体した外国人の情報をもとにして書かれたと思われる。cf. A. von Seibold to E. Hammond "Grand Hotel", Paris, April 18, 1867, (F. O. 46, No. 85), Public Record office, Kew.
- (30) 猪瀬直樹はこの時期の徳川昭武の行動と処遇がオペレッタ『ミカド』のなかで「放浪の皇太子」に擬せられたと指摘している。猪瀬直樹『ミカドの肖像』小学館 一九八六、三五八—九ページ。
- (31) 多木浩二前掲書 一八三—一九六ページ。日本では約二〇年後の天皇「御真影」下付がこの頂点に立つものであった。
- (32) 『訂定備忘録』第二号 (『松戸徳川家資料目録』第一集 Ⅲ—二二)
- (33) 同右
- (34) 当時、帝国博物館総長を務めていた。

執筆者紹介（掲載順）

- 山本 俊朗（やまもと・としろう） 一九二〇年生まれ 早稲田大学名誉教授
 田辺三千広（たなべ・みちひろ） 一九四九年生まれ 慶應義塾大学講師
 加藤 史朗（かとう・しろう） 一九四六年生まれ 麻布学園教諭・早稲田大学講師
 豊川 浩一（とよかわ・こういち） 一九五六年生まれ 静岡県立大学助教授
 高尾千津子（たかお・ちづこ） 一九五四年生まれ 早稲田大学文学部助手
 今村 芳（いまむら・つとむ） 一九五五年生まれ 早稲田大学講師
 白石 治朗（しらいし・じろう） 一九三六年生まれ 中央大学講師
 阪本 秀昭（さかもと・ひであき） 一九四八年生まれ 天理大学助教授
 阿部三樹夫（あべ・みきお） 一九四九年生まれ 早稲田大学講師
 冷牟田修二（ひやむた・しゅうじ） 一九三一年生まれ 早稲田大学本庄高等学院教諭
 井内 敏夫（いのうち・としお） 一九四七年生まれ 早稲田大学教授
 白木 太一（しらき・たいち） 一九五九年生まれ 東洋大学講師
 高田 敏明（たかた・としあき） 一九四九年生まれ 都立国分寺高校講師
 柴 宜弘（しば・のぶひろ） 一九四六年生まれ 東京大学助教授
 近藤 信市（こんどう・しんいち） 一九四七年生まれ 早稲田大学元講師
 稲野 強（いねの・つよし） 一九四三年生まれ 群馬県立女子大学教授
 家田 裕子（いえだ・ゆうこ） 一九五四年生まれ 北海道大学スラヴ研究センター共同研究員
 村井 誠人（むらい・まこと） 一九四七年生まれ 早稲田大学教授
 森 仁史（もり・ひとし） 一九四九年生まれ 松戸市教育委員会学芸員
 稲葉 千晴（いなば・ちはる） 一九五七年生まれ 東洋英和女学院短大専任講師

スラヴ世界とその周辺
—歴史論集—

1992年11月24日 初版第1刷発行

定価9,800円
(本体9,515円)

編者 山本俊朗
 発行者 佐藤晁
 発行所 ナウカ株式会社
 東京都千代田区神田神保町 2-12-3
 電話 (03) 3264-0021
 印刷所 慶昌堂印刷株式会社

© 1992 Toshiro Yamamoto
 ISBN4-88846-033-7
 Printed in Japan